

[博士論文審査要旨]

申請者：酒井 健

論文題目 イノベーションにおける「予期せざる」支持者の出現とその影響
—斜面補強工法の普及を事例として—

審査員 島本 実
加藤 俊彦
坪山 雄樹

本論文の問題意識は、イノベーションの成果を社会に普及させる上では、どのような方策が有効かということにある。これまでの先行研究では、そのためには支持者を増やすことが重要だと考えられてきた。しかし本論文は、企業が何らかの価値を訴えて支持を呼びかける場合には、ときに「予期せざる」支持者が出現する恐れがあると主張する。

この「予期せざる」支持者をめぐる問題について、本論文では、崖崩れを防止する斜面補強技術である「ノンフレーム工法」の事例分析を通じて考察を進めている。この工法は土中に打ち込んだ杭の間をワイヤーで結節するものであり、在来工法とは異なり、重機もコンクリートも使わず、樹木を伐採する必要もない一方で、強度は在来工法と変わらないとされる。このような特性を有するノンフレーム工法は、コスト削減や工期の短縮を実現できる上に、環境・景観保護の面でも優れているという点で、画期的な技術であった。

しかしながら、在来工法と比べて利点が多いはずのノンフレーム工法は、一部の地方自治体では積極的に採用されたものの、多くの自治体では採用が伸び悩んできた。その主たる理由について、本論文では、セメント業界など既存工法の支持者との対立という対抗仮説を定量分析から排除した上で、環境活動家という「予期せざる」支持者の出現に求めている。ノンフレーム工法は、日経優秀製品賞やグッドデザイン賞を受賞することなどで、その存在が広く知られるようになり、環境保護の側面に着目した環境活動家は関係者に対して採用を積極的に働きかけていった。ところが、そのような環境活動家による積極的な支持によって、かえってノンフレーム工法の採用が妨げられることになったと、筆者は主張する。本論文では、環境活動家の行動は、在来工法に信頼を寄せ、環境活動家の主張を疑問視する地域住民との軋轢を生むことになり、中立性を重んじる行政側が、優れた特性を持ちながらも、地域住民からの反対が根強いノンフレーム工法の採用を回避していった点が、具体的な事実に基づいて指摘されている。

本論文における長所の一つは、詳細かつ広範なレビューに基づいて、イノベーションの普及と支持者の関係に関わる既存研究が、明快に整理されている点にある。また、定性的な手法を主軸としながらも、定量的な手法もあわせて用いて、多面的かつ詳細な事例分析が展開されている点も、高く評価できる。とりわけ、行政・企業・地域における関係者を対象とした広範な聞き取り調査に基づく豊かな記述は、注目に値する。

他方で、本論文には検討を必要とする点も残されている。まず、本論文で示された分析枠組みには、環境活動家の位置づけや、どの関係者が実際に重要な役割を果たすのかといった点で、再考の余地がある。また、本論文で取り上げた事例についても、地域的な要因をより詳細に検討することをはじめとして、さらなる展開の可能性がある。しかしこれらの問題点は本論文の長所を損なうものではなく、筆者の今後の研鑽によって克服されることが期待される。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。